

横浜ダンスコレクション 2021 コンペティション I 総評

今回のコンペティション I は、韓国、マレーシア、インドネシア拠点の 3 組の映像上映、日本拠点の 7 組の舞台上演が行われた。コロナ禍にあっても、世界の新たな才能に光を当てるコンペティションが継続されたことは意義深い。

全体として、例年以上に各振付家のスタイルが際立ち、技術も高く、どれも受賞にふさわしい水準にあったと感じた。現実社会の混沌と謎めいた幻想が融け合う独特の世界観を提示した高橋萌登、豊かな振付の語彙で女性の意志と無意識を鮮やかに描いた柴田美和、センチメンタリズムを排し個体間に生成するイベントを分析した井田亜実。そしてミニマルな空間に有機的に広がる nouses の一期一会のデュオは、振付の固定概念を崩す大きな可能性を感じさせた。受賞者の他にも、繊細な心理を視覚化した坂田守、シュルレアリスム的な高瑞貴、音楽と照明を効果的に用いた福田智子、目に見えない運動の法則を暗示して興味深いアングライ、フォルムの端正なソン、知的なザイヒドと、どれも固有の力を持つ作品だった。

だがウェルメイドな作品が多いぶん、驚きが少なかったとも言えるだろう。冒険を恐れず、複雑さを増す社会と果敢に対峙する、まだ見ぬダンスに出会うことを楽しみにしている。

岡見さえ

新型コロナウイルスで渡航や公演活動中止などが相次いだ今年度、たくさんのプログラムが組まれた横浜ダンスコレクションが実施されたことは純粋な喜びだった。そしてライブ上演が醍醐味である舞台作品のコンペティションにおいて、来日が不可能となった海外の振付家らが映像上映での参加となったことは、審査をする側にとっても忘れがたい経験となった。

全体の印象としては、どの作品も振付・演出がこなれていて、身体能力も高く、ダンス作品をしっかりと見た、というある種満たされた感覚を覚えた。しかし反面、ついていけない感覚に陥ったり、狙いを掴むに想像力を働かせたり、驚いたりすることはなかった。うまくできていることは賞賛ポイントでもあるのだが、あらゆる試みがなされてきた身体表現領域で、新たな切り口をプレゼンテーションするには試行錯誤も一筋縄ではいかない。それぞれ評価が分かれる中、個人的には身体感覚や動きの生成について問題意識を持ち、振付手法の中に提示している作品に強く興味を覚えた。荒削りながら、身体同士の関係性を持つ瞬間の緊張感や内的なテンションが映像でも伝わってきた、フィトゥリー・アングライ(インドネシア)の作品と、永遠に続く二つの身体の即興対話を繊細な有機性を持って、現象の質として生み出していく nouses (日本) の作品だ。

新たなダンスの視点を見出すことは、未だ見えざる人間の身体の魅力と、そこに向けられていく眼差しの探求でもある。それらが、ある時には予測できない大胆さによって、ある時には想像を絶する丁寧さによって脈々と続けられてきたことが、多様な広がりを持つダンスの現在につながっている。これからもそれは永遠に続いていく営みであってほしい。

北村明子

授賞式のあとに全員で舞台上で記念撮影をしたが、それが今年のすべてを語っていた。審査員も出演者も全員マスク、ホリズントに映し出されたオンライン映像には来ることができなかった出演者。いつもなら華やかなヨーロッパ諸国のディレクターはほぼ来日できなかった。そんな中で無事にやりきった今年の横浜ダンスコレクションに感謝します。ダンスを創作する側からすると、今回がどのような想いや試練が交錯し作品に立ち上がってくるか興味があったがその部分は、あまり感じられなかった。むしろ表現することの放出力が鈍ってきているところもある。コンペティションでの独特なアプローチがあるのかもしれないが全体的に「似通っている部分」と「他とは違う興味」がそれぞれの振付家にみられた。その創出する時に考えられる道筋のようなものにもっと芯のあるものが感じられればと思います。採点する側から見ても今回は、それぞれの作品への趣が異なり優劣がつけづらいものとなった。今年のコンペティションのもつ意味あいは、今後へ様々な影響を与えていくものになるでしょう。「やっぱりダンスは素晴らしい」ということ、そしてこの若きエネルギーを育てていくことに今後も見守っていきたいです。

近藤良平

この1年間、それぞれの活動への向き合い方があったと思います。オンラインでの表現を模索したり、屋外で踊ったり、稽古場の確保に苦労し、感染症対策を講じながら劇場での上演も続けてきました。今回のダンスコレクションのコンペもその向き合い方の一つとなりました。映像上演での参加になったとしても国内参加者のみで行うことはせず、海外へ開き続けたことは、このコンペの意義を改めて認識することになりました。残念ながら応募総数は例年より減りましたが、コロナ禍でも世界各地でアーティストたちが踊り続けていることを知る機会となり自分も励まされました。審査員賞の高橋萌登さん、奨励賞の井田亜彩実さんはこの状況の中でもこれまでの活動、作品を一段上のステージへと押し上げ高評価となりました。全体的にインパクトや新しさに欠ける印象でしたが、nousesの身体性、インドネシアのフィトゥリー・アングライのユニークネスは強く印象に残りました。感染症下で格段に進んだオンライン環境、VRやARなどのテクノロジーによる身体への再フォーカスに対し、ダンスはどう応えていくのか。引き続きダンスに期待しています。

多田淳之介

おそらく舞台芸術がかつて経験したことの無い大きな危機のなか、国際フェスティバルである横浜ダンスコレクションが無事開催された意味は大きい。韓国、インドネシア、マレーシアからの3名は、入国制限のため、残念なことに映像審査というかたちになった。いま目の前で行われているライブのダンスと、最小限とはいえカット割りを施された映像とを同列に審査するのはやはり大きな困難を伴う。新奇さにいささか欠けるにしても完成度の高い作品をコンペティションとしてどう評価すべきかも悩んだ。新しく先鋭な表現をつねに待ち望んではいる

が、それだけが目的化した創作も疑問だ。今回はさまざまな難問を突きつけられたように感じる。

10 作品はいずれも個性的で面白かったが、早くからその才能を注目されていた高橋萌登がグループ作品に取り組むことでようやく自身の方法論を完全に見出したように感じられてうれしい。今後のさらなる飛躍に期待。nouses のダンスには、ストリートを出発点としながらも、何かこれまで見たことのないまったく新しいスタイルに向かう予感がある。彼らの展開を見続けたい。

浜野文雄

2021 年の横浜ダンスコレクションは様々な意味で特別なイベントとなりました。感染症拡大による危機の影響で、一部の候補者はビデオでの作品発表を余儀なくされましたが、全ての作品の質の高さに私たちは強い感銘を受けました。多種多様な作品が集まり、技術や振付、舞台美術や空間の演出など、候補者たちのレベルの高さが評価されました。作品には真剣さと才能をもって追求した実に様々なアプローチが見られ、どれかひとつの作品を他の作品よりも評価することは難しく、審査には長い時間がかかりました。審査員の皆様には在日フランス大使館よりあらためて感謝を申し上げます。

将来性のある若き振付家、柴田美和さんの作品は、造形的探究と身体を対話させる才能によって在日フランス大使館ならびにエマール・クロニエの注意をひきました。在日フランス大使館賞がサポートを行うフランスでの芸術交流の経験が、柴田さんの研究やインスピレーション、そして次なる創造活動への新たな一歩となることを願っています。

アーティストの皆様の素晴らしい作品にあらためて賛辞を贈るとともに、この非常に特殊な状況の中で素晴らしい仕事をしてくださった横浜ダンスコレクションのチームの皆様に心から感謝いたします。

サンソン・シルヴァン